

市民公開講座 - この子どもたちの目を守るために -

はじめに 湖崎克 (湖崎眼科アクティ大阪分院)

これからの公開講座の講演を二つ聴いて頂く前に、小児眼科について、まずお話しておくことがあります。

我が国での小児眼科の歴史はまだ浅いのです。従来からは小児科すなわち小児内科が古くから独立していました。戦後になり小児外科、小児歯科などが分化して来ましたが、小児眼科が独立したのは、昭和40年に、東京に国立小児病院が、大阪に大阪市立小児保健センターが創立されてからと言ってよいでしょう。それ以来小児眼科医療に多くの眼科医が参加し、全国にこども病院が多く設立され、さらに小児眼科学会が設立され、今日まで小児眼科の臨床や研究が発展の一途をたどっています。

小児眼科医療が従来の成人中心の眼科医療との根本的に異なる点は、子供は単に大人を小さくしたのではなく、子供ことに乳幼児では視力や両眼視などの眼の働きが発達の最中にあるということです。例えば成人の白内障は手術さえすれば、容易に元の視力に回復しますが、子供の先天性白内障は、手術時期が遅れば良い視力は得られませんし、時には如何に早期に良い手術をしても良い結果が得られないことがあります。また、かつては年頃に直せば良いと思われていた斜視は、早期に手術などで眼の位置を矯正しないと、良い視力や良い両眼視、立体感が得られないのです。さらに子供に多い先天性の遠視は、早く発見して眼鏡矯正しないと斜視や弱視(矯正視力がでない)になってしまうのです。そこで私は小児眼科のキャッチフレーズとして「六歳では遅すぎる。三歳でも遅いことがある」と昭和40年以來言い続けています。

したがって、小児眼科の診療の柱は「早期発見」が大切ということになるので、3歳児健康診査や幼稚園、保育所の視力検査がとても大切で、もしそのときに視力が不十分なら大至急に眼科医に受診して貰わねばなりません。もう一つ小児眼科の診療にとって大切な柱は、ご両親の理解と協力です。これが不十分なら治療が成功しません。眼鏡を掛けることすらしてもらえないこととなります。

従って、小児眼科の診療は小児眼科医とご両親の、しっかりとした協力が必要と言うこととなります。今回の公開講座は、この意味でそれぞれの代表的な方々による講演会であり、非常に意義のあるものと考えています。

「医師として」 佐藤美保 (浜松医大眼科)

多くの親御さんは、ご自分のお子さんの目がよく見えていることになんの疑問も持っていないことでしょう。ある日突然、自分のこどもの目が見えなくなったら、あるいは目が見えてないことを知らされたら、どうなるでしょう。混乱し、自分を責めるとともに、どこに行って、だれに相談したらいいのか、全く見当もつかないことになると思います。こどもの目の病気には、いろいろなものがあります。治療によっても限界のある場合もあれば、治療することでよく見えるようになる病気もあります。私たち眼科医は子供たちに少しでも良い視力で人生をスタートしてもらうために、いろいろな仕事をしています。

不思議に思われるかもしれませんが、子供の視力を良くするための治療の中心になるのは眼鏡です。

眼科の外来に来ると、小さなこどもさんが眼鏡をかけている姿をご覧になると思います。そんなとき、多くのかたは「どうしてあんな小さい子が眼鏡をかけているんだろう」「自分の子には眼鏡をかけさせたくない」と思われるでしょう。子供にとって眼鏡が必要な理由はいくつかあります。1) 学校で文字がよく見えて、勉強の支障にならないように、2) 眼鏡をかけることで両眼の向きがきちんとそろってくるように、3) 眼鏡をかけることで視力がだんだんよくなるように、4) 眼鏡をかけることでまぶしさや怪我から目を守るため、などです。このうち、一番多い理由は1番でしょう。しかし、眼科で治療している子供さんの多くは2番や3番なのです。

「眼鏡をかければよく見える」、という状態は、「眼鏡をかけないとよく見えない」の逆だと思われがちですが、目の病気を持っている多くの人たちは「眼鏡をかけてもよく見えない」のです。この「眼鏡をかけてもよく見えない」を「かければよく見える」というところまでもっていくことが子供の時に重要なことなのです。

こどもにとって、眼鏡が大切な理由、そしてよりよい視力を守るために私たちのすべきことについて医師の立場からお話したいと思います。

「親として」 甲斐恵子 (あいぱっちくらぶ代表)

弱視治療中の子どもとその家族をサポートする目的で、平成13年、弱視治療児支援グループのホームページ「あいぱっちくらぶ」を開設しました。弱視の子を持つ1人の親として、他の同じような家族の方々と情報交換しながら、前向きに楽しく治療に取り組むことが出来ないかと考えてのことでした。

ホームページでは、アイパッチにかぶれた時の工夫、嫌がった時の対策としての「あいぱっちカレンダー」、アイパッチや眼鏡をして初めて学校に行く時の心構え、アイパッチや弱視を「卒業」した時の喜びなど、私たちスタッフ自身の経験を基礎に、新しく治療を始められる方々に多少なりとも参考になることを願い、様々なコンテンツを作ってきました。また、札幌、東京、名古屋、大阪、岡山など各地で「交流会」を開き、ネット上のバーチャルな交流だけでなく、現実世界での交流も大切にしてきました。

とはいえ、私たちの活動の中心はやはり掲示板での情報交換にあると思います。子どもが弱視だと初めて告げられた時の困惑やこれからの治療に対する不安、検診結果に対する一喜一憂など、深刻な悩みから明るいおしゃべりまで様々なことが掲示板に書き込まれ、それらに対し、同じ思いで治療に取り組んでいる方々がそれぞれの立場から相談に乗ったり、一緒に考えたりしています。

掲示板でのそんなやりとりから始まった小さな活動が、今年の3月に大きな実を結ぶに至りました。掲示板であれこれ情報交換しながら始まった、治療用眼鏡などに保険適用を求める声がとうとう国に届き、この4月から正式に保険適用が認められることになったのです。これには、全国から寄せられた3万7千筆にも及ぶ署名の力とともに、多くの眼科の先生方や視能訓練士の方々のご理解と各方面への働きかけがあったからこそと、心から感謝しています。

医師や視能訓練士にはその人たちにしか果たせない役割があるように、私たち親には親にしか果たせない役割があると思います。今回保険の適用が認められたのも、それぞれがそれぞれの役割をきちんと果たせたからだだと思いますが、治療を効果的に進めていく上でも、患児である私たちの子供を中心として、医師、視能訓練士、そして私たち親が、それぞれの役割をバランス良く果たして行くことが何よりも大切なのではないでしょうか。

私たちはこれからも、親として何が出来るかを考えながら、活動を続けて行きたいと思います。